

## 狩猟採集民アカの食物規制と治療

富山大学人文学部

竹内潔

### はじめに

アフリカ、コンゴ盆地の熱帯森林帯に居住する狩猟採集民や焼畑農耕民が非常に多くの野生動植物を食物としていることはよく知られている。その一方で、この幅広い食物レパートリーを持つ人々が、食用としている動植物の多くを、とりわけ多数の動物種を何らかの社会的状況にあるときには忌避して食さないことも報告されている。たとえば、旧ザイール（現コンゴ民主共和国）の熱帯森林に居住する狩猟採集民ムブティや焼畑農耕民ガンドゥでは、それぞれ食用としている野生哺乳動物種の 84%、45%を忌避の対象としている（Ichikawa, 1987; Takeda & Sato, 1993）。

このような社会的状況に応じて食物の摂食が回避されるという現象は、アフリカに限らず世界の至るところで見られ、食物禁忌、あるいは食物規制と呼ばれている。

前章では、ムブティやガンドゥと同様にコンゴ盆地の熱帯森林帯に居住する狩猟採集民アカの食物規制について青年期との関わりに焦点をあてて論述したが、この報告では、アカの食物規制の詳細を示すとともに、病因論的側面についても記述する。

### 1. アカの食物規制

アカ (Aka) は、コンゴ共和国北東部の熱帯森林帯に居住し、狩猟と植物性食料の採集を主たる生業としている。彼らは形質的には低身長を特徴とする「ピグミー」の一集団である。人口は、15,000 人から 30,000 人と推定されている（Bahuchet & Thomas, 1986）。アカは、多彩な野生動植物を食物と見なして狩猟と採集によって獲得しているが、規制の対象として動物と植物を比較すれば、圧倒的に動物の方を忌避している。48 種の食用植物のうちで規制の対象となっているのは 8 種 (17%) にすぎないのに対して、128 種の食用動物（昆虫やハチミツを含む）のうち、じつに 83%にあたる 106 種が、何らかの事情で食されない。とりわけ哺乳類は、この地域に生息する種すべてのうち 2 種を除いた 48 種が食用とされているにも関わらず、そのうち 90%近い 42 種が食物規制の対象となっている。以下では、野生哺乳類を対象を絞ってアカの食物規制の様相を見ていくことにしたい。

さて、アカの間では、どのような理由によって、ある動物を食することが規制となるのだろうか。原則をかんたんに言えば、次のようになる。アカにとって、動物を食するという行為は、たんに栄養を摂取する行為にとどまらず、動物が持つ形態的あるいは生態的な特徴まで体内に取り込む行為である。もし食物に対する人間としての抵抗力が弱いならば、奇妙な特徴やどう猛な性格を持つ動物を食すると動物の性質に負けて様々な障害を蒙ってしまう。つまり、アカの食物規制は、食する側の人間の抵抗力と食される動物の特徴

の強烈さの間の相関によって決定されているのである。そして、人間としての抵抗力は、子どもよりも大人が強く、女性より男性の方が強い、と見なされている。したがって、あるアカがどれだけの動物種の摂取を回避しなければならないかということは、そのアカの性と世代によって決定されることになる。以下に、具体的にアカの食物規制を見てみよう。

#### 1) 乳児～少年期

アカによれば、乳児はまだ真の人間ではなく、生と死の間をさまようか弱い存在である。したがって、危険をまねく恐れのある多くの動物の摂食を回避しなければならない(表1)。しかし、乳児は直接動物を食するわけではないので、目には見えない形でまだ乳児とつながっていると考えられている両親が、代わりに多くの危険な動物の摂食を回避しなければならない。危険な動物の例を挙げれば、両親がサルを食べると乳児はサルが歯をむき出した顔に似た引きつけを起こすし、体表に斑点のあるネコ科の動物を食べれば皮膚に黒い発疹を生じる。あるいは、チンパンジーを食すれば、乳児の口がチンパンジーのように度はずれて大きくなってしまう。なお、妊娠期間中も、胎児や出産に食した動物の影響があると考えられ、多くの動物が両親によって避けられる(表2)。

離乳しても子どもは青年期まではまだ両親から完全には独立していない、抵抗力のない存在と見なされるので、子どもたち自身はもちろんのこと、両親もなお危険が残ると思われるかなりの数の動物の摂食を避ける。こうして乳幼児のためにアカたちが避けている哺乳動物は42種にのぼり、このなかにはアカが他の世代で避けるすべての動物が含まれる(表1)。

表1 乳幼児のために避ける哺乳動物

動物*	学名	乳児を持つ親(5名)の回避人数	幼児を持つ親(3名)の回避人数
++ コビトガラコ	<i>Galagoides demidovi</i>	5	3
++ ホスマンス・ポッター	<i>Perodicticus potto</i>	5	3
++ ムササビ	<i>Anomalurus spp.</i>	5	3
++ ツリー・ハイラックス	<i>Dendrohyrax arboreus</i>	5	3
++ モリオネスミ	<i>Cricetomys emini</i>	5	3
++ シタツガ	<i>Tragelaphus spekei gratus</i>	5	3
+ ブラッサモンキ	<i>Cercopithecus neglectus</i>	5	2
+ ジャコウネコ	<i>Genetta spp.</i>	5	2
+ クアシマンゴース	<i>Bdeogale nigripes</i>	5	2
アフリカコールテンキヤット	<i>Felis aurata</i>	5	2

+ キノホ <sup>レ</sup> センサ <sup>ン</sup> コウ	<i>Manis tricuspis</i>	5	0
+ オオセンサ <sup>ン</sup> コウ	<i>Manis gigantea</i>	5	0
+ カンムリク <sup>エ</sup> ノン	<i>Cercopithecus pogonias</i>	5	0
+ アヒ <sup>シ</sup> ニアコロブ <sup>ス</sup>	<i>Colobus occidentalis</i>	5	0
+ アウスタレットアコロブ <sup>ス</sup>	<i>Colobus pennanti oustaleti</i>	5	0
+ ミス <sup>マ</sup> メジ <sup>カ</sup>	<i>Hyemoschus aquaticus</i>	5	0
+ ハ <sup>ム</sup> ・シヘ <sup>ット</sup>	<i>Nandinia binotata</i>	4	3
ナミチンハ <sup>ン</sup> ジ <sup>ン</sup>	<i>Pan troglodytes troglodytes</i>	4	2
カワウツ	Mustelidae(Lutrinae)	4	2
ヒョウ	<i>Panthera pardus</i>	4	1
コウモリ	?	4	1
ノネス <sup>ミ</sup>	<i>Praomys sp.</i>	4	1
モリオオリス	<i>Protoxerus stangeri</i>	4	0
シロハラク <sup>イ</sup> カ- (成獣)	<i>Cephalophus leucogaster</i>	4	0
スグ <sup>ロ</sup> ク <sup>イ</sup> カ- (成獣)	<i>Cephalophus nigrifrons</i>	4	0
ツチブ <sup>タ</sup>	<i>Orycterophus afer</i>	4	0
+ カハ <sup>ン</sup>	<i>Hippopotamus amphibius</i>	3	3
+ アフリカシヘ <sup>ット</sup>	<i>Viverra civetta</i>	3	3
ヌマンク <sup>ス</sup>	<i>Atilax paludinosus</i>	3	2
セスジ <sup>タ</sup> イカ- (幼獣)	<i>Cephalophus dorsalis</i>	3	1
シロハラク <sup>イ</sup> カ- (幼獣)	<i>Cephalophus leucogaster</i>	3	1
ノネス <sup>ミ</sup>	<i>Thamnomys rutilans</i>	3	1
ノネス <sup>ミ</sup>	Muridae	3	1
クチヒゲ <sup>ク</sup> エノン	<i>Cercopithecus cephus</i>	3	0
ヤシリス	<i>Epixerus ebii</i>	3	0
コシキ <sup>タ</sup> イカ- (幼獣)	<i>Cephalophus sylvicultor</i>	3	0
ホオジ <sup>ロ</sup> マンカ <sup>ヘ</sup> イ	<i>Cercocebus albigena</i>	2	1
ノネス <sup>ミ</sup>	Muridae	2	1
ヨジ <sup>リ</sup> リス	<i>Funisciurus spp.</i>	2	0
アジ <sup>ル</sup> マンカ <sup>ヘ</sup> イ	<i>Cercocebus galeritus agilis</i>	2	0
ニシロ <sup>ラ</sup> ント <sup>ゴ</sup> リラ	<i>Gorilla gorilla gorilla</i>	2	0
アカスイキ <sup>ユ</sup>	<i>Syncerus caffer nanus</i>	2	0
アフリカ <sup>ラ</sup> ーテル	<i>Mellivora capensis</i>	1	1
ホ <sup>ン</sup> ゴ <sup>ン</sup>	<i>Boocercus euryceros</i>	1	0
セスジ <sup>タ</sup> イカ- (成獣)	<i>Cephalophus dorsalis</i>	1	0
- フサオヤマアラシ	<i>Atherurus africanus</i>	0	0

- オオハジロクマノエ	<i>Cercopithecus nictitans nictitans</i>	0	0
- カウノシ	<i>Potamochoerus porcus porcus</i>	0	0
- ブルダカ (成・幼獣)	<i>Cephalophus monticola</i>	0	0
- コシキダカ (成獣)	<i>Cephalophus sylvicultor</i>	0	0
- ヒノタスタカ (成・幼獣)	<i>Cephalophus callipygus</i>	0	0
- アフリカゾウ	<i>Loxodonta africana cyclotis</i>	0	0

\* 動物名に付された符号は、+二つは乳幼児を持つ親全員が回避していること、一つは乳児か幼児どちらかの親が回避していることを、-はどちらの親にも回避されていないことを示す。

表2 動物種を食した場合に乳幼児に現れる障害\*

動物**	学名	乳幼児に現れる障害***
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>	ニワトリのように歩くようになる。 ニワトリのように鳴くようになる。
ナチンパンジー	<i>Pan troglodytes troglodytes</i>	口が大きくなる。 (子を強くするために食べるという例もある)
ニシロラントゴリラ	<i>Gorilla gorilla gorilla</i>	強暴になり人をおそう。 (子を強くするために食べるという例もある)
アジルマンガベイ	<i>Cercocebus galeritus agilis</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
ホジロマンガベイ	<i>Cercocebus albigena</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
クチゲクマノエ	<i>Cercopithecus cephus</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
カムリクマノエ	<i>Cercopithecus pogonias</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
ブラッサモンキ	<i>Cercopithecus neglectus</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
アビシニアコロブス	<i>Colobus occidentalis</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。
アウスタレットアカコロブス	<i>Colobus pennanti oustaleti</i>	頭痛 ( <i>kalu</i> ) をもよおす。
ホスマンズ・ポットー	<i>Perodicticus potto</i>	引きつけを伴う「サル病気」( <i>bokono wa makako</i> )になる。 手がポットーのようになる。
コビトガラコ	<i>Galagoides demidovi</i>	目が大きくなる。 手がちゃんと動かなくなる。
キノボリセンザンコウ	<i>Manis tricuspis</i>	胸が痛む ( <i>yeu</i> )。
オオセンザンコウ	<i>Manis gigantea</i>	難産 (子が腹に戻る)。 傷 ( <i>mpota</i> ) ができる。

ツチフタ	<i>Orycteropus afer</i>	難産 (子が腹に戻る). 脚が痛くて ( <i>kole</i> ), 歩きたくない.
ツリー・ハイラックス	<i>Dendrohyrax arboreus</i>	背の白い毛が腹にはいる. ツリーハイラックスのようにヨーカーと鳴くようになる.
カハ	<i>Hippopotamus amphibius</i>	発疹 ( <i>tuku</i> ) がでる.
アカスイギェウ	<i>Syncerus caffer nanus</i>	胸が痛む ( <i>yeu</i> ).
ミス・マシカ	<i>Hyemoschus aquaticus</i>	尻が裂ける. 発疹 ( <i>tuku</i> ) がでる.
シタツンカ	<i>Tragelaphus spekei gratus</i>	死に至る病にかかる. 弱くなったのろのろと歩く.
セスィダィカ-	<i>Cephalopus dorsalis</i>	のどがかゆくなる. 皮膚が赤くなる.
シロハラダィカ-	<i>Cephalopus leucogaster</i>	発疹 ( <i>tuku</i> ) がでる. 幼獣:下痢する.
スグロダィカ-	<i>Cephalopus nigrifrons</i>	発疹 ( <i>tuku</i> ) がでる.
アフリカシハット	<i>Viverra civetta</i>	黒い発疹 ( <i>bo.koba</i> ) がでる.
アフリカラーテル	<i>Mellivora capensis</i>	死に至る病にかかる.
カワウソ	<i>Lutra maculicollis?</i>	手がカワウソのようになる.
ハム・シハット	<i>Nandinia binotata</i>	大病を患ってすぐ死ぬ. 子に黒い発疹 ( <i>bo.koba</i> ) がでる.
シヤコウネコ	<i>Genetta spp.</i>	黒い発疹 ( <i>bo.koba</i> ) がでる.
クアアシマングス	<i>Bdeogale nigripes</i>	皮膚が白くなる.
ヌマシマングス	<i>Atilax paludinosus</i>	下痢をする.
アフリカコールテンキヤット	<i>Felis aurata</i>	黒い発疹 ( <i>bo.koba</i> ) がでる.
ヒョウ	<i>Panthera pardus</i>	黒い発疹 ( <i>bo.koba</i> ) がでる.
ヨシリリス	<i>Funisciurus spp.</i>	” エッエツ ” と鳴くようになる.
ムササビ	<i>Anomalurus spp.</i>	引きつけを起こす.
モリオネズミ	<i>Cricetomys emini</i>	皮膚が白くなる. 胸が痛む ( <i>yeu</i> ).
野ネズミ (kendo)	<i>Thamnomys rutilans?</i>	大きく育たない. 口が尖る.
野ネズミ (pala)	<i>Praomys sp.</i>	大きく育たない.
野ネズミ (bange)	Muridae	大きく育たない. 口が尖る. 胸が痛む ( <i>yeu</i> ).
野ネズミ (ebofo)	Muridae	大きく育たない.

モグ <sup>ラ</sup>	Chrysochloridae	死に至る病になる.
コウモリ	?	顔がコウモリのように不細工になる.
カメ (lendi)	?	首が回らなくなる.
カメ (elenge)	?	首が回らなくなる.
		子の首が長くなる.
オトカ <sup>ガ</sup>	<i>Varanus niloticus</i>	手が大きくなる.
ハイ <sup>キ</sup> ヨ	Protopteridae	出産が遅れる.
ナマス <sup>ゴ</sup> (ngolo)	Pelteobagridae	舌が小さくなる.
ナマス <sup>ゴ</sup> (ndika)	Pelteobagridae	呼吸が荒くなる.
		動作がおそくなる.
モルミ <sup>ル</sup> ス	Mormyridae	呼吸が荒くなる.
魚 (mo.kenge)	Cyprinodontidae	下痢をする.
魚 (mo.mpanda)	?	腹の病気になる.
淡水エビ	?	頭の形がおかしくなる.
マイ <sup>マイ</sup>	?	頭の形がおかしくなる.
ハリナ <sup>ハ</sup> チ (sumba の蜜)	Trigoninae	下痢をする.

\* 惹起される障害が判明したもののみのリスト.

\*\* 括弧内はアカの動物名.

\*\*\* 括弧内斜体はアカの症候名.

## 2) 青年期

第二次性徴があらわれ、また日常生活で両親からやや距離をおくようになると、青年たちは自分が食すると害を受けそうな動物を何種類か選択して、自発的に摂食を回避しだす。また、初潮を見て「女性」となった女子たちは、「男の動物」と呼ばれる 15 種の動物を食すことを避けるようになる。「男の動物」とは、肉食獣やゴリラのように「強い」動物であり (表 3), 女性が食するとその強さに負けて、発疹などが出るとされる。女性は、思春期以後閉経に至るまで、この一群の動物を食することを控える。

表3 「男の動物」

動物	学名	回避人数（7人中）
ナミチンパンジー	<i>Pan troglodytes troglodytes</i>	7
ニシローランドゴリラ	<i>Gorilla gorilla gorilla</i>	3
アウスタレットアカコブス	<i>Colobus pennanti oustaleti</i>	6
アカスイギュウ	<i>Syncerus caffer nanus</i>	3
シタツカ	<i>Tragelaphus spekei gratus</i>	6
アフリカシベット*	<i>Viverra civetta</i>	6
アフリカラーテル*	<i>Mellivora capensis</i>	2
カワウソ*	<i>Lutra maculicollis?</i>	6
パーム・シベット*	<i>Nandinia binotata</i>	6
ジヤコウネコ*	<i>Genetta spp.</i>	7
クロアシマンングース*	<i>Bdeogale nigripes</i>	7
ヌマンングース*	<i>Atilax paludinosus</i>	7
アフリカゴールデンキャット*	<i>Felis aurata</i>	7
ヒョウ*	<i>Panthera pardus</i>	7
カバ	<i>Hippopotamus amphibius</i>	5

\* 食肉目

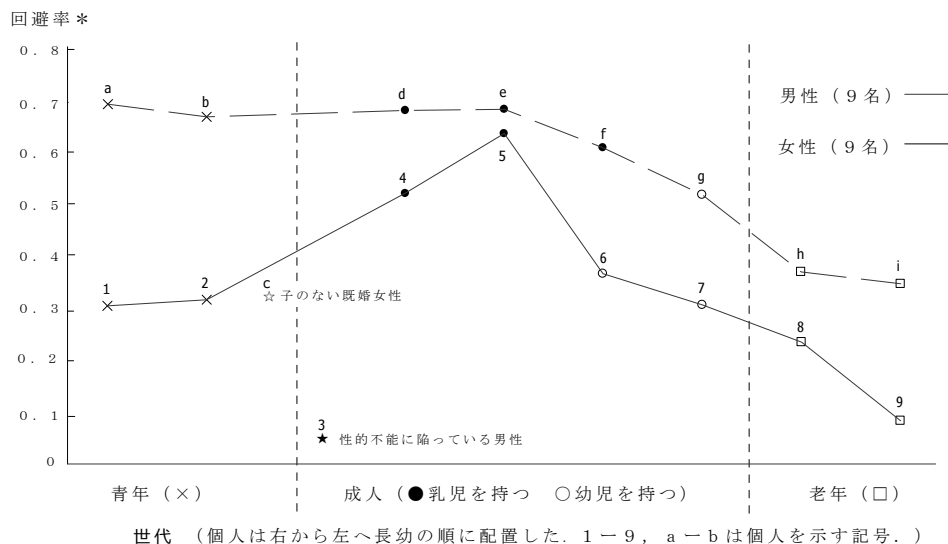
### 3) 成年期

アカでは、女性は結婚して子をもうければ成人と認められるし、男性は狩猟経験を積んで多くの獲物をしとめられるようになれば成人として認知される。大人になるということは人間としての成長が完成したということであるから、未熟な青少年期に食することができなかった動物をもはや避ける必要はなくなる。しかし、実際には結婚して乳幼児を持つことになるので、その子のために多くの動物を食べることができないし、女性の場合はそれに加えて「男の動物」を食べることができない。

### 4) 老年期

アカの社会では、老人は体力が衰えたとしても決して弱い存在ではなく、むしろ長年積み重ねた経験によって外界に対して最も抵抗力を持つ存在だと見なされている。しかも、もはや乳幼児の親として食物を避けることもなく、また閉経して「女性」としてのライフ・ステージを終了した老婆も「男の動物」を食べることができる。したがって、老境に至れば、男女とも食用とされるすべての動物を食することができる。ただし、これはあくまで原

則であって、実際には老人たちはかつて回避していた動物のうちの何種かは引き続き食べないのが通常である。



\* 摂食回避種数を全回答種数で除した値

(性・世代による回避率の推移傾向を見るため、便宜的に個人間を線で結んだ。)

ここで、実際に青年以上の男女がどれだけの動物の摂食を回避しているかを、回避している動物種の割合で見てみよう。図から、男性よりも女性が多く回避率が高いこと、乳児を持つ親がもっとも回避率が高いこと、また男女とも、老年期の食事の自由度が他の世代に比べて高いことなど、上述の規制についての記述を具体的な個人の資料から確認することができる。青年女子の回避率が高いことが目を引くが、これは彼女たちが乳児を持つ親が避ける動物を選択して回避するためである。なお、結婚してもまだ子をもうけていない女性と性的不能に陥っている男性は、それぞれ同じ段階の男女と比べて回避率が例外的に低く、むしろ老人の回避率に近い。これは、彼らが生殖の面から自分たちを老人になぞらえているためと解釈できる。この例からもうかがえるように、アカの食物規制は、自分がどのライフ・ステージに属しているかという個人の自覚と深く結びついているのである。

## 2. 障害と治療

アカの食物規制は、厳然たる社会的な規則としてあるわけではなく、破った者に社会的処罰が加えられるわけでもない。規制の遵守はあくまで個人の自覚にまかされているのである。したがって、誤って食べてはならない動物を食べてしまうこともときおり起こる。このような過誤によって身体に引き起こされる症候は、乳児のところで例に出したような食べた動物の特徴がそのまま身体にコピーされてしまうという劇的なものばかりではない。下痢や頭痛といった一般的な症候も多い。いずれにせよ、規制の動物を食したために障害が生じたならば、すみやかに治療を施さなくてはならない。



一般的な症候に対しては、通常の病いに対するのと同じ、野生植物を用いた治療がおこなわれるのが通例である。なお、アカの社会には治療を専門とするような者は存在しない。すべての病気や怪我の治療は、患者本人なり家族なりがおこなうのである。ただし、アカの世界には呪術による病いも存在し、これに対しては呪医が専門的な治療をおこなう。

アカの野生植物の医薬利用については、Motte(1980)が詳細に報告しているが、ここでは報告者が収集した薬草を利用したアカの一般的な療法を挙げておく。

#### a)腹痛・下痢

シロハラダイカー (Cephalophus leucogaster) の幼獣やヌママングース (Atilax paludinosus) を親が食すると、その子どもが腹痛や下痢を引き起こすという。腹痛や下痢に対する一般的な療法としては、Desplatsia cf. trillesiana TILIACEAE, Thomandersia hensii ACANTHACEAE, Manniophyton fulvum EUPHORBIACEAE などの葉をそのまま食べたり、あるいは煎じて飲む。また、Garcinia punctata CLUSIACEAE, Guibourtia demeusei CESALPINIACEAE などの樹皮を粉末にして水にといたり、煎じたりして飲むこともある。

#### b)頭痛・胸痛

アビシニアコロブス (Colobus occidentalis)、アカスイギュウ (Syncerus cafferr nanus)、モリアフリカオニネズミ (Cricetomys emini) などを親が食すると子どもの頭が、キノボリセンザンコウ (Manis tricuspis) を食すると胸が痛む。鎮痛には、Erigeron floribundus ASTERACEAE の葉を煎じて飲む。あるいは、Monodora myristica ANNONACEAE の果汁を額に塗る。胸が痛む場合は、Canarium schweinfurthii BURSERACEAE の樹皮を粉末にして水とともに飲む

#### c)発熱

親がサル類を食したため、乳児が高熱を発して引きつけをおこすことがある。解熱のためには、Palisota hirsuta COMMELINACEAE の葉を煎じて飲んだり、Morinda longiflora RUBIACEAE の葉を刻んで水に入れ、沸騰させてその蒸気を身体にあてたりする。

#### d)発疹

親がネコ科の斑点のある動物を食すれば黒い斑点が、またミズマメジカ (Hyemoschus aquaticus)、スグロダイカー (Cephalophus leucogaster)、シロハラダイカーを食すれば赤みを帯びた発疹が乳幼児の皮膚にあらわれる。発疹に対する対処としては、Mammea africana CLUSIACEAE の樹皮を患部に擦りつける。

以上のような一般的な療法は、病因と考えられる動物がそれほど特徴を有していない場合にとられる。これに対して、他の動物に比べて際だった特徴を持つ動物を食したことに

病因が認められる場合は、一種の同種療法が併用される。同種療法とは、病因となった動物種と同じ動物種の体の一部を用いて障害を取り除く療法である。たとえば、乳児を持つ親が不注意にもサルを食べてしまい、その結果乳児が高熱を発してひきつけを起こした場合、両親は食したのと同種のサルの毛を焼いてその煙を子に当てる。あるいは、サルの中でもアビシニアコロブスは引きつけだけでなく、子どもに頭痛をもたらすと信じられているが、この場合には頭痛を鎮めるため、アビシニアコロブスの毛皮を切り取って子の頭に巻きつける。この療法を予防に用いて、食すと難産を招くと考えられているセンザンコウの鱗を、妊娠中の女性が腹に擦り付けるといったことも見られる。

親が食するとその動物の特徴が子どもの身体にコピーされるといった障害はもっとも深刻なものである。しかし実際には、このような危険きわまりない動物はアカが容易に捕獲できない動物であることが多いし、また厳しく摂食が避けられているため、アカたちはとりたてて特別の対処を用意していない。

#### 4. まとめ

アカの食物規制の様相と規制を破った際に引き起こされる障害とそれに対する対処を見てきた。彼らの食物規制の前提となっているのは、物を食するという行為は人間世界の外からいわば異物を属性ごと体内に取り込む行為であるという観念であった。その観念に、人間は生物学的成長とともに世代といった社会的成長を遂げることによって、そういった外界の異物である食物が持つ、いわば「毒」に対する抵抗力を身につけていくというアカの生命観が交差して、規制の具体的なあり方が決定されている。また、規制を破った際には様々な障害が惹起すると信じられているが、強烈な特徴を持つ動物を食した直後に何らかの病的症候が生じた場合には、同じ動物の一部を薬として用いる、いわば「毒をもって毒を制す」治療が試みられる。このように、アカの食物規制は野生の食物の摂食を回避することを通じて、彼らの人間と外界についての世界観を表現しているのである。

#### 文献

- Bahuchet, S. and J. M. C. Thomas, 1986. "Linguistique et Histoire des Pygmées de l'ouest du bassin Congolais," Sprache und Geschichte in Afrika, 7-2
- Ichikawa, M. 1987. "Food restrictions of the Mbuti Pygmies, Eastern Zaire", African Study Monographs, Supplementary Issue 6.
- Motte, E., 1980. Les Plantes chez les Pygmées Aka et les Monzombo de la Lobaye (Centrafrique), SELAF, Paris.
- Takeda, J and H. Sato, 1993. "Multiple subsistence strategies and protein resources of horticulturalists in the Zaire Basin: The Ngandu and the Boyela" In: C. M. Hladik, A. & et.al. (eds.), Tropical Forests, People and Food, UNESCO, New York.